各人各説

川の風景をささえるもの

早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 教授

佐々木 葉

Yoh Sasaki

四年前にNPO法人「郡上八幡 水の学校」を立ち上げた。岐阜県郡上市八幡町に育まれた水環境と文化を学び、伝え、継承し、これからの水のまち郡上八幡を創造していくための場としてである。夏の郡上踊りでも有名なこのまちには、軒先を巡る水路や洗い場、水屋など多様な水利用施設が日常に活き、長良川とその支流の吉田川、小駄良川といった清流が、風景としてだけでなく釣りや川遊びの場として生活の中にある。こうした水を巡る環境と知恵に魅せられた人々が「水の学校」をつくった。

恒例となった夏のオープンキャンパスでは、東京の学生達も参加して、地元の子ども達に楽しんでもらうイベントを行う。今年は、既に長く活動されてきた「ちちこの会」のアマゴつかみを応援することになった。吉田川が長良川に合流するあたりで、ワンドのような流れの場をつくり、一〇〇匹のアマゴを放流してつかみどりをする。つかんだアマゴはその場で炭火で塩焼きに。七月二十四日午後のそのイベントのため、前日の朝から始まる準備に私も加わった。

まずは川原の草刈り。本流から分かれた小さな流れをつかみ取りの場とするための小さな河川工事。手で石を動かし、導流堤や堰となるものをつくる。藻や泥がついた石を綺麗にするため箒で川底を掃き、大きな石は一つひとつ手で磨く。アマゴが隠れやすい石の隙間も確保して、程よい大きさ、深さ、流れの漁場をつくる。川原の樹を利用して日よけのシートを張り、アマゴを焼くためのドラム缶を切った竈を設置。これで前日の準備はおおよそ完了。

翌日は流れに網をはり、トラックで運ばれてきたアマゴを放流。テントを張り、火をおこし、こまごまとしたものを整えてスタンバイ。三々五々集まってくる子ども達と親御さん。注意事項説明の後、一斉に子ども達が川に入る。歓声、水音、笑い声。子ども達のこの様子をみるのが楽しみで「ちちこの会」を毎年続けてきた。参加費はとらない。おじさま達は、来年はこんな風にしようと真剣に話している。スタッフには釣りたての鮎も振る舞われた。

大変な労力である。単なる労力でなく、技術と知恵である。それも体にしみ込んだ。

前日の夜には昔の川と川遊びについてのお話も聞くことができた。吉田川の流れは今よりずっと多様で、岩や淵のそれぞれに名前があり、生き物と人の知恵比べ、狩猟という遊びの場としての豊かさを誇っていた。そこでの体験の記憶が身体化しているおじさま達が、現代の子ども達のために惜しみなく労をとる。そこに立ち上がる夏の川辺の風景。

川という環境、それが育む人、人が育む川と人。この循環が持続的であるために、いま何をしなければならないか。おじさま達はおじいさま達になりつつある。単なる河川構造物への配慮ではなく、もっと深い何かが必要である。